
The Elder Scrolls ? OBLIVION Re:PLAY

さる～めん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Elder Scrolls ? OBLIVION
Re:PLAY

【Nコード】

N6650X

【作者名】

さるゝゐん

【あらすじ】

タムリエル大陸の中央に位置する、シロディール。この帝国が支配する美しき自然豊かな地を舞台に、異国から渡航してきた少年と少女が冒険を繰り広げる。

海外の人気オープンワールドRPG『オブリビオン』のMODに基づいたオリジナル要素を含んだリプレイ小説。

パーティーメンバー紹介を別ページに分離しました。

プロローグ（前書き）

初のゲームリプレイ作品です。

しかもあのオブリエオン。自由度高くて気ままに冒険できるRPGです。

それではどうぞ、お楽しみください！

プロローグ

シロディール　タムリエル大陸の中心をなす地域。

北をノルド族の地スカイリム、東をダークエルフ族の地モローウインド、南を獣人カジート族の地エルスウェイアに囲まれた、自然に恵まれた地。

シロディールを支配する帝国の都を中心に、西端の湾港都市アンヴィル、スカイリムに近い降雪地帯のブルーマ、東部の森林に囲まれたシェイティンハル、帝都の港へと通じる南部のニーベン川河口に位置するレヤウインといった都市が囲むように存在する。

今、一隻のガレオン船がニーベン川を上り、帝都の港を目指している。

船頭「あれはブラヴィル、トカゲどもが住み着いた汚い街さ」

レビン「ブラヴィルかあ、あともうちよつとで帝都に着くね」

ヴァージニア「そうね、レビン。楽しみだわ」

ガレオン船に乗る二人の乗客、レビンとヴァージニア。

彼らは遠い大陸からはるばるこのシロディールへとやって来た。

レビンは甲冑に身を包んだ騎士の少年。一方のヴァージニアは魔道士の少女である。

船頭「嬢ちゃん、一昔前のRPGに出てきそうなビキニ鎧で風邪ひかねえのか？」

ヴァージニア「平気よ。シールドと冷氣防御の魔法が掛けられているから寒さを感じないわ。それにあまり着こむと呪文の有効性が低下するの。だから魔道士にとってはなるべく肌を露出したほうがいいのよ」

レビン「僕みたいに鎧着てると有効性がガタ落ちになるしね」

船頭「ならいいんだ。でも目のやり場に困る……」

やがてレビンたちの視界にニールベン川の水源である湖に浮かぶ城塞が映る。

城壁で囲まれた都市の中央から塔が天に届くばかりに伸びているように見える。

船頭「あれが帝都だ」

レビン「すごい！ あれが帝都！」

ヴァージニア「でも外から見ただけじゃ、スケールが小さく感じるわ」

船頭「そろそろ波止場だから、ついたらじっくり見学してきなよ」

ガレオン船は、帝都の波止場に到着する。

甲板から埠頭へと板が敷かれ、レビンとヴァージニアは初めてシロディールの地を踏む。

船頭「あまり寄り道せず城壁の中に入りな。寄り道して万一のことがあったら保証はできないぜ」

レビン&ヴァージニア「ありがとう！」

レビンとヴァージニアは埠頭から帝都城壁へと向かって歩く。
その道中でうわさ話が聞こえてくる。

通行人A「なあ、グレイ・フォックスって知ってるか？」

通行人B「ああ、灰色の覆面を被った泥棒だろ？ お偉いさんはいないないの一点張りだな」

通行人A「あんたは信じてるのかい？ 奴の存在を」

通行人B「もちろんだとも。あんなカリスマがいなけりゃ、盗賊になりたがる奴など増えやしなよ」

レビン「ジニー、グレイ・フォックスなんて盗賊がいるんだって」

ヴァージニア「聞くからには結構有名みたいね。でもわたしには泥棒になるなんてごめんだわ」

レビン「だよな。僕たちは盗んじやいけないってさんざん親から言われてるしね」

レビンとヴァージニアは、グレイ・フォックスの話題を耳にした後、城壁の前へとたどり着く。

ヴァージニア「いよいよ、この門を開ければ……」

レビン「僕たちは帝都へと踏み出すことになるね。それじゃ、行くよ」

ヴァージニア「ええ！」

二人は一緒に門を開けた。

すると、そこには石造りの豪華な街並みと立派な神殿があった。

レビン「これが、帝都……！」

ヴァージニア「なんて素晴らしい街並みなのかしら！ 聞いた通り……いいえ、想像以上だわ！」

帝都の街並みに感激する二人。

こうして、レビンとヴァージニアのシロディールでの冒険が始まった。

仲間探し（前書き）

今回は、レビンたちがシロディールの案内人を探すお話です。

仲間探し

シロデイルの帝都に踏み入れたレビンとヴァージニア。
波止場に隣接した神殿地区を見まわった後、ふたりは『白金の塔』
のある中央部へとたどり着く。

レビン「うわー、ここが皇帝の住む塔……」

ヴァージニア「すごい迫力ね。間近でみると、こんなにも大きいな
んて……」

レビン「そうだ、塔の中に入ってみようよ」

ふたりは、塔の中に入ろうとして、扉のそばに立つ衛兵に尋ねる。

9

レビン「あの、塔の中に入りたいんですが」

衛兵「観光客か。かまわないが、廊下しか見学できないぞ」

ヴァージニア「レビン、どうする？ 廊下しか見られないみたいだ
けど……」

レビン「いいや。廊下だけでも見れば十分だよ」

ふたりは扉を開け、塔内の見学をはじめ。

レビン「皇帝が住むだけあって、建築様式も凝ってるね。」

ヴァージニア「なんたって皇帝の住処ですものね。建築家の気の入りが伺えるわ。」

ここでレビンが、中心部の部屋への扉に関心を向け、衛兵に話す。

レビン「衛兵さん、この部屋は？」

衛兵「この中は元老院議事堂。今はオカート総書記官しかいないよ。」

ヴァージニア「皇帝はいらっしゃらないのですか？」

衛兵「ああ、今陛下は監獄である囚人に会われておられる。理由はわからぬがな。」

レビン「そういえば皇帝の名前って何と言つのですか？」

衛兵「ユリエル・セプティム七世だよ。」

こうして、レビンたちは塔内の見学をひと通り終え、塔から外に出る。

レビン「ねえ、ジニー。」

ヴァージニア「なあに、レビン？」

レビン「僕たち、あまりシロディールに詳しくないよね。だからガイドになってくれる人が欲しいんだけど」

ヴァージニア「それもそうよね。確かに無知なままじゃ危険だものね」

レビン「うん。だからこの国に詳しい冒険者を募りたいと思うんだ」

衛兵「正しい判断だな。外には猛獣や野盗がうようよしてる。案内人は必要だな。仲間を募りたいなら、冒険者の集まる宿にいくといい」

レビン「衛兵さん、その宿屋ってどこにあります？」

衛兵「宿屋なら西のタロス広場、北西のエルフ・ガーデン地区、北東の商業地区に一つずつあるよ」

レビン「ありがとうございます。それじゃヴァージニア、ひとまずタロス広場の宿屋に行ってみようか」

ヴァージニア「そうしましょう、レビン」

レビンとヴァージニアは、中央地区を抜け、西部のタロス広場に入る。

レビン「ここがタロス広場か。真ん中にはドラゴンの像があるね」
ヴァージニア「しかも門のほうに顔を向けているわ。まるで、侵入者がいないかどうか睨みつけているみたいね」

レビン「そういえば最初に訪れたとこの神殿もドラゴンに関係しているって話を聞いたし、帝国はドラゴンとなんか関係があるのかな」

ふたりはドラゴン像に感心しつつ、宿屋『タイバー・セプティム・ホテル』を見つける。

そして宿屋に入ると、そこには金髪でポニーテールの幼い女の子が宿屋のロビーでくつろぐ冒険者に手当たり次第尋ねているのが見える。

ヴァージニア「あの子、幼く見えるけど見るからに家柄がよさそうな子よね」

レビン「冒険者を募っているようだけど、拒否されつづけているみたいだね」

すると金髪の女の子が、レビンとヴァージニアに近づいてくる。

女の子「あなた方も冒険者ですか？」

レビン「うん、そうだけど」

女の子「わたくしはメアリーと申しますわ。帝都の外に興味を持ったんですけど、一人では危険なので仲間を募っていましたの。しかしわたくしの小さな姿では、誰も失笑しては聞き入れてくれないのです。あなた方なら聞き入れてくれそうで、よろしければわたくしもお仲間に入れていただけませんか？」

ヴァージニア「わたしたちは遠い異国から来たのだけど、それでもいい？」

メアリー「構いませんわ。あなたたちは異国の旅人なのですわ、ならわたくしがシロディールのことをあなたたちに教えて差し上げますわ」

レビン「よかった。この子、シロディールの地理に詳しいみたいだよ?」

ヴァージニア「小さい女の子でもこの国の住人だし、案内役には良いかもね」

レビン「というわけで、僕たちで良かったら一緒に行こう」

メアリー「まあ、ありがとうございますわ。あなた方のお名前は？」

レビン「僕はレビン」

ヴァージニア「わたしはヴァージニアよ」

メアリー「レビンにヴァージニアという名前なのですわ。どうかよろしくお願いいたしますわ」

こうして、貴族の娘メアリーがレビンたちの仲間に加わった。

仲間探し（後書き）

案内人はなんと幼女！しかもお嬢様口調！
個人的趣味出まくりですみません…

さて、次回のお話は初めての洞窟探索です。

はじめての探索 ? (前書き)

レビンたちは腕試しのため、帝都の近くにあるゾノット洞窟の探索に挑みます。

まずはその前編。

はじめての探索 ？

レビンとヴァージニア、そして新たに加わったメアリーは、宿屋を出て一旦城壁の外に出た。

メアリー「シロディールには洞窟や遺跡が沢山ありますわ。この国の冒険者はそこを探索して生計を立てていますのよ」

レビン「そうなんだ」

メアリー「ですけど、洞窟や遺跡の中はモンスターや山賊でいっぱい。生半可な気持ちで入ってはゴーストやスケルトンの仲間入りですわ」

ヴァージニア「つまり死ぬってことね」

メアリー「というわけで、まず腕ならしのため近くの洞窟の探索に行きましょう。旅の資金を稼ぐのも兼ねてね」

レビン「そうだね」

レビンたちは門を離れ、湖のほとりにあるゾノット洞窟へとたどり着く。

メアリー「まずはゾノット洞窟を探索してみましょう。この洞窟には帝都を荒らす盗賊の住処になっていると聞いていますわ」

ヴァージニア「ねえメアリー、なんで帝都の衛兵さんたちはこんな近くの洞窟の山賊を取り締まらないのかしら？」

メアリー「所詮衛兵なんてお役所仕事の連中ですわ。ただ馬に乗って街道をうるついでスターツプ！ って怒鳴るだけでお金をもらえるのですから」

レビン「いくら衛兵でもそこまで手が回らないってわけか。これだから冒険者の生活が成り立ってわけだね」

ヴァージニア「そうみたいね」

レビンたちは洞窟の扉をあけ、中に入る。

洞窟の中はとても薄暗く、もやもかかっている。視認は困難極まるものだった。

レビン「うわあ、先が見えづらいなあ」

メアリー「しっ、静かに。また盗賊たちが住み着いているのかもしれませんのよ」

メアリーの指摘を受け、レビンたちはなるべく音を立てずに進む。メアリーは言うと同時に、松明に火をつけて辺りを照らす。

ヴァージニア「松明を用意しているなんて、メアリーは気が利くの

ね

メアリー「備えあれば憂いなしってことですわ」

レビンを先頭に、三人は洞窟を進んでいく。

洞窟は横に狭いが縦に広く、天井部分がさらに広がっている様子が見える。

レビン「天井部分に空洞が広がってる……橋もかかっているし、人があそこにいるんだろうか」

その時、レビンは足元でプツンとする音が聞こえた。直後に背後から衝撃が伝わりレビンは昏倒する。

それは、丸太が背後に降り掛かってくるトラップであった。

メアリー「ちょっと、なんでよそ見をするんですの!？」

ヴァージニア「レビン!！」

ヴァージニアは悲鳴混じりの声で幼馴染の名前を叫び、丸太を跨いで彼に寄り添う。

レビン「づづく……」

ヴァージニア「待っててね、今癒してあげるわ」

ヴァージニアは回復魔法ヒールの呪文を唱え、レビンの背中に軽く手を当てる。

あまりのダメージに悶絶するレビンに、ヴァージニアの手から淡い癒しの光が包みこむ。

レビンは痛みが引き、楽になるのを感じる。

レビン「ありがとう、ジニー。楽になったよ」

ヴァージニア「いいのよ、レビン。あなたが傷ついたら、いつでもわたしが癒してあげるからね」

レビンの笑顔が松明に照らされ、ヴァージニアもつられて微笑む。二人は幼い頃からとても仲良し。レビンの怪我をヴァージニアが治療したことで、二人の仲は一層深まったようだ。

しかし、ここで天井から野太い人の声が甲高く響いてくる。

????「誰かが入ってきたぞ!!」

????「侵入者だ、ぶち殺せ!!」

メアリー「いけない! 気づかれましたわ!!」

無数の足音が、洞窟の中に響き渡る。

メアリーは足音を聞きつけると、咄嗟に松明の炎を消して一冊の書物を取り出す。

メアリー「いでよ、スケルトン！」

すると、アンデッドモンスター・スケルトンが出現する。

メアリーは魔道書を使って、召喚魔法を発動したのである。

ただし魔道書は一回のみしか使えず、効力を失った書物は朽ち果ててしまう。

メアリー「一旦退きますわよ!!」

レビンたちは一目散に出口へと向かい外に出る。

スケルトンが残された場所に、洞窟に住み着いた声の主である山賊たちが群がる。

山賊A「なんだ、ただのスケルトンじゃねえか」

山賊は斧を振り回し、一撃でスケルトンを倒す。

すると、紫色の煙がたちこめてスケルトンは消滅する。

山賊B「こいつ、召喚モンスターだ!!」

山賊C「すると俺たちの縄張りに侵入した奴らは置き土産を残したってわけか」

山賊A「追っぞ！」

山賊たちはレビンを追撃するべく、洞窟の外へとでる。

山賊B「くそっ、いねえ！」

山賊C「逃げられたか！」

しかし、この時レビンたちは、洞窟の上の崖から山賊たちを待ち伏せしていた。

レビン「行こう、みんな！」

レビンとヴァージニアは崖から飛び降り、て山賊たちに奇襲する。レビンの剣が山賊Aの背中を引き裂き、山賊は痛みに喘ぐ。

山賊A「き、貴様ら！」

ヴァージニアは斧を両手で構え、山賊Aへと走っていく。

ヴァージニア「山賊たち、覚悟なさい！」

ヴァージニアと山賊は、同時に斧を振りかぶった。互いの斧がぶつかり、火花を散らす。

山賊A「小娘が、なめんじゃねえ！」

ヴァージニア「こ、小娘だからって……甘く見ると痛い目にあうわよっ……！」

力では山賊が上だが、レビンの一撃を受けたことによる痛みによって攻撃力が低下し動きも鈍っていた。

ヴァージニアは敵の状況と持ち前の身のこなしを生かし、斧の一撃を敵の急所に叩き込む。

山賊A「ぐおおおっ……！」

山賊Aは急所に斧を叩きこまれたことにより、絶命する。

山賊B「ふざけるなっ……！」

ヴァージニア「きゃあっ……！」

今度は山賊Bが、ヴァージニアにメイスの一撃を与える。
突然の不意打ちに殴り倒されてしまうヴァージニア。

メアリー「わたくしの弓の嗜み、見せてあげますわ！」

メアリーはヴァージニアにさらなる一撃を与えようとする山賊Bに狙いを定め、弓矢を放つ。弓矢は山賊の心臓部を貫き、男の巨体が崩れ落ちる。

そしてレビンと山賊Cは互いに剣をぶつけ合い、一進一退の攻防を繰り返していた。

レビン「っ、強い！」

山賊C「こいつ、ガキのくせに粘りやがる！」

山賊Cは剣技に長けた男である。彼の剣さばきがレビンのそれを凌ぎ、しだいに流れが山賊に傾いたかに見えた。

しかし、この時冷気の礫が山賊に命中した。ヴァージニアが攻撃魔法アイスブラストを発動したのである。

ヴァージニア「レビン、今よー！」

レビン「くらえっ！ー！」

レビンの剣は、ヴァージニアの魔法攻撃に仰け反った山賊に会心の一撃を与えた。それと同時に山賊は断末魔を上げ、そのまま倒れた。

レビン「やった、山賊たちを倒した!」

メアリー「やりましたわね、皆様」

ヴァージニア「はあ……怖かった」

レビン「どうしたの？ ため息ついちゃって」

ヴァージニア「だって、下手したら死んじゃうかもしれないんだけど。そう考えるとわたし、怖気づいちゃって……」

メアリー「でもわがままは言ってもらえませんわ。このような危険がいつ襲いかかってくるのかわかりませんのよ?」

ヴァージニア「メアリーの言うとおりだわ。これからいくらでも戦うというのだから、怖がっちゃいけないわよね」

レビン「でもみんな無事でよかった。それじゃあ洞窟の探索を再開しよう」

メアリー「その前に山賊たちから資金になりそうなものはあらかじめ戴いていきましょ」

メアリーはそう言うと、倒れた山賊たちを調べ始める。

ヴァージニア「死人とはいえ勝手に人のものを取っていいの？」

メアリー「この世界では普通らしいですわ。これからいくらでも資金は必要になりますし、遠慮せずに取っておかないと損ですわ」

レビンたちは山賊たちから金品や売れそうな鎧をあらかじめ戴き、洞窟の中へと再び入っていった。

はじめての探索 ? (後書き)

次回はゾノット洞窟探索の後編。お楽しみに。

はじめての探索 ? (前書き)

ゾノット洞窟探索の後編です。

はじめての探索 ？

山賊たちを撃退し、再度洞窟に入るレビンたち。

今度はトラップに引っかからないために用心は怠らない。

レビン「今度は大丈夫。油断してトラップに引っかかるなんてへまはしないよ」

ヴァージニア「でも用心するつもりでいて、またトラップに引っかかるなんてこともあるかもよ」

メアリー「そうですね。注意するといっても口だけで終わるのが人間ですものね」

レビンたちは会話しながら、松明に照らされた洞窟の中を進む。すると突然レビンが目の前に宝箱を見つける。

レビン「宝箱だ。何か財宝を貯めこんでいるかも」

レビンは意気揚々と宝箱を開けようとするが、宝箱は開かない。

レビン「鍵がかかっている」

ヴァージニア「さっきの山賊さんから頂いたロックピックで開けて

みたら？」

レビンたちは倒した山賊から、ロックピックと呼ばれる鍵をこじ開ける道具を手に入れている。

レビンはロックピックを鍵穴に差し込み、カチャカチャと音を立てて鍵を外そうとする。

しかし、ここでパキンと響きロックピックは折れてしまう。

レビン「ロックピックならまだまだある」

レビンはさらにロックピックを数本取り出して鍵を解除しようとするも、次々と折ってしまう。

メアリー「ああもう、じれったいですわね。わたくしに任せてくださいな」

鍵開けに四苦八苦するレビンの姿にメアリーはしびれを切らし、今度は彼女が解錠を試みようとした。

ヴァージニア「メアリー、あなた鍵開けられるの？」

メアリー「まあ見ててくださいませ」

メアリーはロックピックを持つ手を器用に動かす。するとカチャッという音が鳴る。

鍵の解錠を、メアリーは成功させたのである。

メアリーは自慢するかのような表情で宝箱を開ける。

レビン「す、すごい。小さい女の子なのに鍵開けられるなんて」

ヴァージニア「メアリー、あなた誰から鍵開けを教わったの？」

メアリー「秘密ですわ。さっさと宝箱の中のポーションとお金を取って奥へと進みましょう」

レビンたちは宝箱の中のアイテムを回収し、さらに奥へと進む。

山賊たちのいた上階の空洞に辿り、橋をわたって奥の焚き火のある場所へと行くと、さらに上階へと向かう通路を見つけてその中に入る。

そして三人は最上階の部屋の扉を開き、その部屋へと足を踏み出す。

ヴァージニア「見て、山賊たちがいるわ」

レビン「ひょっとしたら山賊たちのボスがいるかもしれないね」

メアリー「ここは慎重に行きますわよ」

レビンたちは背を屈め、音を立てずに前進する。

レビン「合計三人かあ。見つからずに進むのは難しそうだ」

ヴァージニア「ねえメアリー、あなたの弓矢を使って物陰から山賊を倒せないかしら」

メアリー「それもそうですわね」

メアリーは頷き、部屋の間にいる山賊に狙いを定めて弓を引く。狙われた山賊は、まだこちらに気づいていない。

メアリーは神経を集中し、山賊の頭を目掛けて矢を放つ。

山賊「うっ！」

メアリーの弓から放たれた矢は、見事山賊の頭に命中した。山賊は絶命し、その場に倒れる。

レビン「さあ、進もう」

レビンたちは最奥を目指し、音を立てずに進める。

奥にはもう一人山賊が見張っていたが、レビンたちは山賊の目をかいくぐり闇に紛れて通過する。

そして部屋の最奥にたどり着くと、そこには宝箱があった。

レビン「一番奥にあるから、結構いいものが入ってるだろうなあ」

ヴァージニア「どんなものが入っているのか楽しみね。メアリー、解錠をお願い」

メアリー「任せてくださいませ」

メアリーは先程の宝箱と同様にロックピックを使い、鍵を外す。そして宝箱を開くと、中には魔道書と青色の石が入っていた。

レビン「ねえメアリー、この石は？」

メアリー「それはソウル・ジェムですね。モンスターの魂を捕獲する魔法があればその石の中に魂をいれることができますの」

ヴァージニア「モンスターの魂を封じ込めたとして、どんな使い道があるの？」

メアリー「魔法武器エンチャントの魔力を回復させることができますわ」

その時、向こうで何やら山賊たちが騒いでいるのが聞こえてきた。

山賊「大変だ、やられた！」

山賊「くっ、侵入者か！」

レビン「大変だ、山賊を倒したのがバレた」

ヴァージニア「どうしましょう……」

メアリー「落ち着いてくださいます。運良くこの魔道書が手に入つてよかったですわ」

メアリーは魔道書を開き、書かれた文を詠唱する。
するとレビンたちの体が透明になる。

メアリー「透明になる魔法ですわ。さあ脱出しましょう」

山賊たちが騒ぎながら侵入者を探す中、レビンたちは彼らを尻目にその場を脱出する。

そしてゾノット洞窟から外に出て、レビンたちは帝都の城門前へとたどり着く。

ヴァージニア「洞窟の探索も、案外楽じゃないものね」

レビン「でも結構楽しかったね。山賊を倒すのは気が引けたけど……」

メアリー「レビン、ヴァージニア、あなたたちとならいい冒険ができそうですわ。これからもよろしくお願いしますわね」

レビン」「ちうこそ、よろしく頼むよ」

ヴァージニア「よろしくね、メアリー」

こうしてレビンたちのシロディールでの初日は終わった。

レビンたちはメアリーと出会った宿にチェックインし、そこで一夜を明かしたのだった。

はじめての探索 ? (後書き)

今回はレビンたちが皇帝の夢を見ます。

ここからオブリビオンの物語の本格的なスタートになります。

王者のアミュレット(前書き)

帝都のホテルにて、レビンは夢を見る。その内容は、この国の皇帝が何やら話しかけてきたものだったが……

王者のアミュレット

ゾノット洞窟の探索を終えたレビン、ヴァージニア、メアリーの三人は宿で一晩を明かす。

その夜、レビンは夢を見る。それは、高貴な佇まいを持つ老人が語りかける夢だった。

老人「今シロディールはデイドラ王の一人デイゴンにより危機に晒されている。この『王者のアミュレット』を余の最後の子マーティンに渡し、龍の炎を灯すのだ。まずはこのアミュレットを持って、ウェイノン修道院のジヨフリーに会いに行くのだ」

老人は、背後から襲いかかってきた赤いローブの男に刺殺される。続いて部屋に入ってきた兵士が赤いローブの男に剣の一撃を与える。

男「陛下、陛下!」

陛下と言っているところからして、先程刺殺された老人はこの国の皇帝なのだろう。レビンがそう思っているところで視界が変わり、アミュレットを持ったみすぼらしい男が下水道を走る光景が映る。その男を、赤いローブを着た人間が二人追いかけていた……。

レビン「ふ、ふわぁぁ……」

ここで、レビンが目を覚ます。

窓から朝日の光がさし、眩しさで一瞬目がくらむ。

レビン「よく寝たなあ……それにしても、あの夢とても現実的だったなあ」

レビンは身支度を済ませると、ロビーで二人の少女たちと合流する。

ヴァージニア「おはよう、レビン。夕べは良く眠れた？」

レビン「まあね」

メアリー「それにしても、なんだか浮かない顔をしていますわね」

レビン「うん、不思議な夢をみたんだ」

ここでレビンは二人に昨日彼が見た夢の内容を話す。

メアリー「皇帝陛下が殺害されたのと言つのですの？」

レビン「うん。皇帝はアミュレットをウェイノン修道院のジョフリーのところを持って行ってってくれって言った。その後赤いローブを

着た暗殺者に殺されたんだ」

ヴァージニア「そういえば昨日皇帝は監獄に行ってるって衛兵さんが言ってたわよね」

レビン「もし僕の見た夢が正夢なら、シロディールは今危機にさらされているってことになる。一刻も早くアミュレットを持った男を探そう」

メアリー「男は下水道を走っていたのですよね。監獄の周辺に下水道の入り口があると聞いたことがあります。そこに行けば出会えるかもしれませんわね」

レビンは宿を出ると、紙束を持った男が彼らに近づいてきた。

男「今日の黒馬新聞だよ！ しかも大スクープ、ユリエル・セプテイル陛下が暗殺されたんだよ！！」

レビンは新聞を受け取り、紙面を読む。

ヴァージニア「レビンの夢は正夢だったみたいね」

レビン「行こう、監獄の下水道に」

三人は城壁の外にでて、監獄地域にある下水道の入り口へと向か

う。

そこには、赤いローブを着た男の死体と夢に出てきた瀕死の男がいた。

レビン「この人、夢に出てきた人と同じだ！」

ヴァージニア「今にも死にそう……回復してあげないと」

瀕死の男「無駄だ。もう俺は助からん……暗殺者の毒の刃にやられた。それよりも、こいつを持ってウェイノン修道院へ向かってくれないか」

瀕死の男はアミュレットをレビンに手渡す。

瀕死の男「修道院のジョフリーという男に陛下からマーティンを探すのを頼まれたと言った。そうすれば信じてくれる……」

男は、そのまま息絶えた。

レビン「みんな、ウェイノン修道院に行こう。アミュレットを託されたからには僕たちがやらないと」

メアリー「レビンの言うとおりですわね。ウェイノン修道院は帝都から西のコロールのはずれにありますわ」

ヴァージニア「この人のためにもわたしたちでアミュレットを届けてマーティンという人を探しましょう。それにしても、なんだか面倒な事になってきちゃったわね」

こうしてアミュレットを託されたレビンたちは、シロデールに忍び寄る危機に立ち向かうため、まずはウェイノン修道院へと向かうこととなった。

王者のアミュレット(後書き)

今回はウェイノン修道院に向かいます。レビンたちは無事にアミュレットをジョフリーの元に届けられるか、乞うご期待！

修道院への道（前書き）

レビンたちはアミュレットをジヨフリーに渡すため、ウェイノン修道院を目指します。

修道院への道

皇帝のアミュレットを入手したレビンたちは、ウェイノン修道院を目指すべく帝都を発った。

帝都の正門から伸びる大橋を渡り、一軒家に差し掛かったところでメアリーは地図を開く。

メアリー「この街道を歩いていけば、夕方あたりにはコロールにたどり着けますわ」

レビン「結構近そうだね」

ヴァージニア「案外すんなりいけるかも」

メアリー「でも最近コロールへの街道は盗賊がたむろしていると聞いておりますわ。十分用心したほうがいいですわね」

レビンたちはコロールの位置を確認すると、街道を辿って歩いて行く。

道端はしばらく草原が続き、三人は鹿が三匹ほど駆けていく光景を楽しんだ後、坂道に変わる。

坂道を登り切ると林道に変わり、レビンたちはその中をひたすら進んでいく。

しばらくすると、遠くに石造りの砦が見えてくる。

レビン「あの砦、帝国の衛兵の駐屯所かな」

メアリー「いいえ、あそこはゴブリンたちの住処になってると旅人が言っておりますわ」

ヴァージニア「ゴブリンねえ……何だか弱そうないメージがあるけど」

メアリー「シロディールのゴブリンを甘く見ないほうがいいですわ。彼らはとても凶暴でしぶとい連中ですよ」

メアリーのゴブリンに対する忠告を聞きつつ、レビンたちは皆を通過する。

しかし、砦を出ようとした所で盗賊が立ちはだかった。

盗賊「おい、痛い目に会いたくなきゃ100ゴールド出しな」

ヴァージニア「早速柄の悪そうな盗賊が出てきたわね」

メアリー「こんなチンピラに金を出す必要なんてありませんわ、レビン」

レビン「そういうことだ。悪いけど諦めてくれないかな」

盗賊「上等だ」

すると、盗賊は手斧を片手にレビンたちに襲いかかる。

ヴァージニア「覚悟なさい、アイスブラスト！」

ヴァージニアはアイスブラストを放ち、盗賊を悶えさせる。

メアリー「行きますわよ！」

レビン「うんー！」

さらにメアリーは小剣ショートソードを引き抜き、盗賊を突き刺す。さらにレビンの剣による追い打ちが決まり、盗賊は何も出来ずに倒された。

ヴァージニア「楽勝だったわね、みんな」

レビン「そろそろ日が暮れてきたし、真っ暗にならないうちに修道院を目指そう」

岩を抜けた先は再び林道となり、レビンたちはその道を進んでいく。

畑を通り過ぎ、いよいよ修道院らしき建物が見えてきた。その後方には都市の城壁が見える。

ヴァージニア「ねえ、あれがウェイノン修道院じゃない？」

メアリー「奥にはコロールの城壁がありますし、間違いありませんわね」

レビン「早速入ってみようよ」

レビンたちは修道院へと向かい、扉の前に立ってノックする。すると、扉からローブを着た修道士が出てきて、三人を出迎える。

修道士「このウェイノン修道院になんの用ですか？」

レビン「あの、僕たちはジョフリーという人に会いに来たんです」

修道士「ジョフリー様なら二階にいます。どうぞお入りください」

レビンたちは修道院の中に入り、階段を登って二階へと上がる。二階の部屋の奥には、書物を読む初老の男がいた。

メアリー「あれがジョフリーという人かもしれませんわね」

ヴァージニア「早速話しかけてみましょうよ」

レビンたちは、早速男に話しかける。

レビン「ジョフリーという人は、あなたですか？」

ジョフリー「確かに私はジョフリーだが、一体何の用件か？」

レビン「王者のアミュレットを持って来ました」

ジョフリー「王者のアミュレットだと？ それは皇帝陛下にしか手にできないはず。見せてくれたまえ」

レビン「はい、これです」

レビンはいうと同時に王者のアミュレットをジョフリーに手渡す。

ジョフリー「これはまさしく王者のアミュレット。君らは一体何者なのだ？ 陛下が亡くなられたことについてなにか知っているのか？」

レビンたちはまずそれぞれの名前を名乗り、続いて帝都の下水道入り口での出来事と夢で見た出来事を混じえた内容をジョフリーに話す。

ジョフリー「突拍子も無い話だが、君たちも信じよう。これも陛下の数奇な運命がなせた業だろうからな」

ヴァージニア「陛下はデイゴンがこの国を脅かしていると仰っておりましたが、デイゴンとは何者のですか？」

ジョフリー「デイゴンは『灼熱地獄のオブリビオン』の支配者だ。普段はこの世界は結界に守られていてオブリビオン界とつながることはない。だが、陛下が亡くなり世継ぎもいないゆえに神殿の龍の炎が弱まり、魔法の結界が消えてこの世界はオブリビオン界とつながるつととしている。」

オブリビオンとは、デイドラ王が支配する異世界の名称である。異世界の風景はデイドラ王によって様々なものがあるが、デイゴンの支配する異世界は灼熱の地獄のような世界のようなのだ。

ここでメアリーが、皇帝の遺児マーティンについてジョフリーに言及する。

メアリー「陛下にはご落胤のマーティン様がいると聞きましたわ」

ジョフリー「彼の存在を知るものは少ない。私はかつて陛下の親衛隊『ブレイズ』の隊長だった。当時私は陛下に呼ばれ、赤子であったマーティン様を別の場所へと連れ出すよう命じられて私はその任務を遂行した。今マーティン様は生きていたらここからはるか西のクヴァッチにいるはずだ。今すぐ彼を見つけ出し、マーティン様をお連れするのだ」

レビン「はい、ジョフリー様」

こうして、アミュレットをジョフリーに渡したレビンたちは、遙か西の街クヴァッチを目指すことになった。

だがもう夜も更け、一晩明かす必要が出てきた。

ヴァージニア「今日はコロールで一泊しましょう。こんな真っ暗な
中を進むのは危険だわ」

メアリー「そうですね。わたくしも賛成ですわ」

レビン「確かに。コロールの宿屋で一泊すべきだね」

レビンたちは修道院を離れ、コロールの中に入る。そして宿を取
り、一夜を明かした。

修道院への道（後書き）

次回、クヴァッチへ行く……の前にコロール散策。
大人気の子が出てくるかも！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6650x/>

The Elder Scrolls ? OBLIVION Re:PLAY

2011年10月24日07時15分発行